ぬす人といふもことはりさ夜なかに君が心をとりにきたれば

〔倭訓栞中編八〕こゝろいられ　心の苛つく也

〔増補雅言集覽二以〕いらるた所煎にて胸をやく、こがすなどに同、せきスル意也、○中略　補（中略）文雄云、（中略）こはもと出たる語にて、苛はあたり難き物故に、性急なるをいらち、いらだつなどいひ、さて轉じては、物草の莖などにある苛より をいそぐ事にいへるなるべし、俗にせきこむといふに同じ、廣足云、（中略）煎といふ語も、火勢にこがして、其物を強くするなれば、同言なるべくおぼゆ、

〔源氏物語四十四竹河〕人はかうこそのどやかに、さまよくねたげなめれ、わがいと人わらはれなることろいられをかたへはめなれて、あなづりそめられにたるとおもふも、むねいたければ、○下略

〔萬葉集二相聞〕久米禪師嫪石川娘女時歌五首○中略

東人之荷向薦乃荷之結爾毛妹情爾乘爾家留香問、

〔倭訓栞中編八古〕こゝろにくし。　伊勢物語に見ゆ、心置せらるゝをいへり、今もいふ詞也、　禪師

〔伊勢物語上〕まれ〳〵にかのたかやすにきてみれば、はじめこそ心にくゝもつくりけれ、今はうちとけて、○中略手づからいゐがひとりて、けこのうつはものにもりけるをみて、心うがりて、いかずなりにけり、

〔空穗物語嵯峨院〕みぎのおとゞをば、心にくき、はづかしきものゝ、心ある人にし給ふ、

〔伊勢物語上〕いさゝかなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出ていなんと思ひて、かゝる歌をなんよみて、物にかきつけける、

出ていなば心かるしといひやせん世のありさまを人はしらねば、とよみおきて、出ていにけり、

〔枕草子十一〕わろき物は

いとあやしき事を、男などはわざとつくろはで、ことさらにいふはあしからず、わがことばにも